

木綿と藍染の文化史～庶民は何を着ていたか

【天然繊維の起源】

- 木綿 メキシコ 紀元前6000年、インド 紀元前5000年
- 亜麻（リネン） トルコ 紀元前6500年、エジプト 紀元前4000年
- 絹 中国 紀元前3000年
- ウール メソポタミア 紀元前2000年



伝説の植物バロメツ

【庶民が着た植物性繊維】

木綿、 麻：苧麻（カラムシ）・大麻

芭蕉（沖縄 芭蕉布）、オヒョウ（アイヌ・アットウシ織）、シナノキ（羽越科布 日本最古）
カシノキ和紙（白石紙布）、クズ（掛川葛布）、フジ（藤布）、コウゾ（楮布・太布）

【麻（靱皮繊維）と木綿の比較】

- 麻（靱皮繊維）の特徴：丈夫で破れにくい。伸びにくい。ゴワゴワで突っ張り、体にフィットしない。夏涼しいが保温性なく冬寒い。草木では染めにくい。糸つむぎが非常に手間で、大量生産出来ず農家の自家用が大部分。商品として流通しにくい。
- 木綿の特徴：柔らかく、体にフィットする。保温性が高く暖かい。草木でも染めやすい。特に藍との相性が抜群。糸つむぎの効率が良く、分業による大量生産が可能で商品として流通。価格も安くなり庶民が買えるようになった。

三河に漂着したインド人

【真綿と木綿】

「綿」とは古代・中世まで絹のワタ（蚕の繭をほぐしたもの）だったが、室町時代に木綿（棉）が出現し、「木綿」と区別するため、「真綿（まわた）」という表現が出来た。



【木綿以前の庶民の寒さとの闘い】

祖谷山などでも・・・夏冬を云わず太布（コウゾなど樹皮の繊維で作った布）を着ることにて、寒の強き年は、単衣の太布を五枚七枚も重ね着る故に「今年は六枚の寒さなり、七枚の寒さなり」と云う。『古語拾遺新註』

【木綿の伝来】

- 平安時代初期にインド人の青年が三河に漂着し、棉の種をもたらしたが、栽培出来ず。
- 15世紀後半応仁の乱（1467年～）で軍需用として朝鮮から大量輸入。日本の需要が過大で朝鮮は輸出制限。明は朝貢貿易のみ。
- 15世紀末筑前など西日本で栽培始まり、16世紀末には東北以外の全国に普及。

【おあむの嘆き 戦国末期の衣生活】

「おれが十三の時、手作りのはな染の帷子一つしかなく、・・・一つのかたびらを十七の年まで着たるによりて、すねが出て難儀にあった。せめてすねのかくれる帷子一つ欲しやと思うた。・・・今時の若衆は、衣類のものすき、心を尽くし、こがねを費やし、・・・沙汰の限りなこと」『御庵物語』

【戦国武将と木綿】

- 火縄銃の火縄。木綿を五倍子と鉄漿で防水処理した火縄は雨中でも消えなかった。
- 旗、幟、陣幕、陣羽織 麻ではなく鮮明な色に染まる木綿が 重宝された。
- 帆布 木綿登場以前は藁か草で編んだ筵の帆。木綿の帆布により舟の速度が大幅にアップ。

【江戸時代の木綿】

- 江戸初期、北海道・東北以外の全国で綿の栽培が行われ、農村では木綿の自給が一般的となった。幕府も農民は布（麻）・木綿を着るよう通達。（会津藩など木綿栽培奨励）
- 実綿生産・繰り綿・綿打ち・篠巻・紡糸・織布・晒加工（漂白）などが専門化して社会的な分業が進み、更に周辺産業（藍、干鰯、廻船業など）が発展することで日本経済は自給自足の段階から商品経済へ大転換。木綿が日本の近代化の基軸となった。⇒ 綿業栄光の時代

【明治時代の木綿】

- 明治政府は絹と並び木綿を輸出産業にするため堺・愛知・広島などに官営工場を開設したが、和綿は繊維が短く英国製紡績機械に使用不可で工場を払下げ。民間紡績業者は安い外国（インド・中国）綿輸入自由化を求め、国産木綿を切り捨てた。明治29年4月1日帝国議会は綿花輸入関税撤廃を決議。
⇒ 数年で日本の綿花生産消滅。江戸期綿業栄光の時代終焉。

*日本の産業構造を変える一大契機



綿の実

農業国 ⇒ 貿易優先工業国転換の象徴

【木綿とカラムシの伝統的な糸つむぎ法】

- 苧麻（カラムシ）：①刈取り・浸水・皮はぎ ②苧引き
③苧績み ④撚り掛け

- 木綿：①綿繰り ②綿打ち ③篠巻 ④撚り掛け

*木綿撚り掛け（糸紡ぎ）実演 房総のむら 小倉三枝子氏



撚り掛け

【藍染めについて】

● 藍染の起源

- 紀元前 2500～ 1200 年頃エジプトの古墳でミイラの藍染め巻布発掘。
- 紀元前 300 年頃シルクロードを通じて、藍染めの布製品が盛んに行き来。
- 中国、日本、ヨーロッパ、東南アジア、中近東、アフリカ等で様々な藍染が行われた。
- 1897 年ドイツで人工藍（合成インディゴ）工業化。天然藍は衰退。
- 現在天然藍は超貴重な絶滅危惧状態。

● 現存する日本最古の藍染め（正倉院）

752 年 東大寺大仏開眼会で使用された
「大仏開眼の縷（縷の縷・はなだのる）」



●藍の種類

- タデアイ：タデ科タデ属の一年草、インドシナ南部原産で中国経由渡来。紅花・紫草と共に三草と呼ばれる重要植物。木綿にもよく染まり染料の代表。染色は葉のみ使用。本州の藍。
- キツネノマゴ科の琉球藍、マメ科のインドアイ、アブラナ科のタイセイ（ヨーロッパタイセイ、エゾタイセイ）などインディゴを含む植物は世界各地に100種以上ある。

- 藍染め衣料の効能：抗菌、耐熱、対磨耗（火消し装束）、色褪せしない、保温、体臭防止、皮膚病防止、止血・防虫・毒へび防止（鎧の下に着る）、衣類の虫除け、紫外線防止など。合成インディゴにはこれらの効能はない。

- 庶民の衣料と藍染 ⇒ 藍は木綿によく染まり、木綿の普及により藍染めが溢れた ジャパンブルー



地白型紙

【藍染めの手法】

- 建染め（染法）：葉を発酵させてスクモを作り、灰汁に溶かして染め液を作り、布を浸け、大気中で酸化させて藍色に発色させる。（日本以外ではヨーロッパ、西アフリカなど）
- 建染め（沈殿法）：葉を水に2～3日浸け、棹などでかき回して空気を送り込み、石灰を入れ色素を沈殿させ、上澄みを捨て残った液（泥藍）を染料とする。（沖縄・インドなど）
- 生葉染：下記参照
- 乾燥葉染：タデアイ乾燥葉をアルカリ還元、酸で中和させて50～60度で煮染めする手法。

【タデアイの育て方】

- ① 3月後半～4月上旬（霜が降りない時期）にポットやプランターに種を撒く。
- ② 5月初めころ本葉が5～6枚で畑に植え替える。（土に腐葉土や堆肥を多めに混ぜておく）
- ③ 土が乾いたら根元に水をたっぷり遣る。日当たりは半日陰位が良い。雑草はこまめに取り除く。
- ④ 7月末頃1回目の収穫。（追肥）地面から10cm位で刈ると1ヶ月程で2回目の収穫可能（開花すると色素はなくなる。9/下～10月頃）
- ⑤ 10～11月花後に種を取り乾燥して保管

【藍の生葉染】常温・媒染剤不要。古代からの手法。

タデアイの生葉を粉碎した液に絹の生地を浸けて水色に染める藍染。実施可能時期は生葉が収穫できる7月末～9月初め。毎夏、船橋・松戸などで体験教室開催。希望者は h6igata@ybb.ne.jp へ。

【生葉写し染】

夏休み自由研究の場合、タデアイと他の植物の葉で比較も面白い。

- ① ビニールの上に白木綿布を敷き、水気を取った生葉を載せ、セロテープで固定。
- ② その上から別のビニールを被せ、小さめの金づちで根気よくまんべんなく叩く。ある程度叩いてから裏返し、色素が付いていない部分を丁寧に叩く。

*力加減が難しく、強すぎると形が崩れ、弱いと染まらない。

葉が濡れていると水が滲んで輪郭がぼける。無垢材のしっかりしたテーブルが良い。